

自立する子ども

—対象・他者とのよりよいかかわりを築きながら—

1. 研究テーマの設定の理由

(1) 生活科学習でめざす子ども像

本校の子どもたちは、『ひと・こと・もの』に対する興味や関心が高く、文化的な活動・経験も豊富である。学習の場においても、少し難しいなど感じる課題にも意欲的に取り組むことができる。また、それぞれの場に応じて判断し適切な行動をとることができる子どもも多い。

反面、あふれる情報（子どもたちの周りを取りまく『ひと・こと・もの』にかかわる情報）のなかで、正しく情報の取捨選択をし、よりよく対象にかかわることが難しい子どもも少なからずいる。身の回りの対象に自分の都合のよいかかわり方をするため、対象を正しく認識できなかつたり、自分の思いを出しすぎたりして、周囲とうまくコミュニケーションがとれず、自己のよりよい変容をさまたげている面もみられる。低学年の子どもの特性ともいえるこのような実態が中学年以降の子どもたちにも少なからず見られるのは、本校の子どもたちだけではないように感じる。発達段階に応じたコミュニケーション能力がつかず、「子どもの自立」が妨げられていることに危惧を感じる。

生活科とは、子どもが、まず対象によりそい、問題意識をもって対象に働きかけ解決していく学習であり、一人ひとりの子どもの自立をめざした営みである。自分の思いをもって対象によりそい、自分と対象のよりよい関係を築く。さらに、その場の心地よさを作り出している自分を含めた一人ひとりの存在の大切さに気づき、他者に対して思いやりのある働きかけができる子どもの育成をめざして、研究テーマを『自立する子ども』と設定した。

私たちが考える『自立する子ども』とは、

- ①自分でできる子
- ②周りに広められる子
- ③振り返り生活に活かせる子

である。

(2) 生活科学習における「学びの質の高まり」

本校では、「学び」を対象と他者と自己と対話する三位一体の活動であるととらえている。また、「学びの質の高まり」として、対象、他者、自己への認識を更新することであるとしている。生活科では、これらの対話を、自分と身近な人々、社会及び自然など「ひと・こと・もの」とのコミュニケーションであるととらえ、学びの過程として次の3つを考えた。

- ① コミュニケーションのめばえ…対象に興味・関心をもち、かかわる。
- ② コミュニケーションの広がり…問題意識をもって対象とかかわり、身近な人々と時間、空間を共有し、互いの思いや考えを伝え合う。
- ③ コミュニケーションの深まり…学んだことを振り返り、自分の生活に当てはめ、活用していくことで、新しい自己や他者、対象との対話を深める。

この学びの過程そのものがコミュニケーションであり、学びとるものがコミュニケーション能力である。対象と心地よいコミュニケーションを図ろうとすることが、自立の第一歩と考える。そのためには、思いやりや心くばりだけではなく、生きる術を身につけることが大切である。生きる術とは「社会のルールを身につけること」「マナーを身につけること」「生活上の技術を身につけること」などである。

よりよいコミュニケーションを通して、対象に対する認識、他者に対する認識、自己に対する認識が更新され、生活科学習での「学びの質の高まり」がみられると考える。

2. 研究の展望

今年度、生活科では、主に「和」の生活様式に根ざした学習活動『附属っ子コミュニケーション“和み”大作戦』を計画し実践していく。少しずつ子どもたちの周りから遠ざかってしまっている「和」の生活様式を意識的に取り上げ、子どもたちに再認識させ、改めてあたたかな“和み”の空間の心地よさに気づき、思う存分浸らせたい。またその空間をともにする周りの人々との心のつながりを大切に、空間の作り手としての自分自身の存在を感じとらせたい。これらの学びから、一人ひとりが対象と好ましい関係を作ろうと、希薄になりがちな人間関係（家族・友だち・地域社会）に自ら進んでよりよくかかわっていこうとする意欲・態度が育ち、子どもたちの自立につながることを願っている。

今年度、次の5点を重点的に取り扱う。

(1) 『日本の季節感』を感じる

「学校たんけん」や「町たんけん」をとおして、四季の移ろいを、『ながめ・手に取り・嗅ぎ・聴き・味わう』ことで身体全体で感じ取らせたい。そこで見つけた季節を、身近に取り入れ楽しむ場を設定する。また、学校農園を利用して、野菜や植物を育て、季節を肌で感じ取らせたい。

(2) よき『日本の生活習慣』を身につける

形式的なマナーやルールを身につけるのではなく、“和み”の空間に流れる心地よい雰囲気を感じることに重点をおき、初歩的な礼儀・作法を身につける。

(3) 『日本の伝統文化』にふれる

学校周辺は文化施設や史跡にめぐまれている。その環境を活かし、日本の伝統文化・行事にかかわる機会を設定する。

(4) 他の教科・領域との関連

「学校たんけん」や「町たんけん」で見つけた草花や実を飾るための器作りや、学校農園で作った旬の作物を使った和菓子作りなど図工科や食育教育との関連をはかる。また、感じたこと、発見したこと、考えたことを、絵・図・文などで表現する活動も大切にしたい。

(5) 保護者や地域の方々とのふれあい

子どもたちのより充実した体験・活動のために保護者や地域の方々にも活動に参加していただく。『ふぞく“和み”隊』（活動ボランティア）を組織し、保護者や地域の方々にも和んでいただけるボランティア活動としたい。

3. 成果と課題の把握の手立て

生活科は、子どもたちの思いや願いから活動が広がり、学習が発展していく教科である。そのため、1時間ごとの子どもたちの様子やつぶやき、学習の振り返りから子どもたちの思いを十分みとることを大切にしている。子どもたちが表出する絵・文・図・劇などから学びの過程をみとりたい。また、生活科の授業の中での振り返りだけでなく、国語や図工など他教科での子どもたちの学びの姿もみとりたい。

『附属っ子コミュニケーション“和み”大作戦』での学習活動においては、その内容の特性から、日本の生活習慣を取り上げることが多いが、それぞれの活動で取り上げたマナーや技術（いわゆるスキル）を身につけることができたか、できなかったかという視点だけで評価するのではない。子どもたち自身が十分“和み”の空間にひたり、身近な人々とその空間を共有する心地よさを感じ、活動を楽しむことができているかということに重点をおいて子どもたちの学びの姿をみつめていきたい。